

カトマンズ、パタン 地震復興状況報告

2017年2月1日～2日に、ネパールのカトマンズとパタンを訪問しましたので、街の様子を簡単にご報告します。

観光客の目で見ると、街は活気があり、人や物で溢れ、地震の残した影は修復を待つ建築物のみにあるように思われます。被災後に家屋や生計の再建ができない人々もおられると思いますが、その姿は忙しい往来の中にはありません。この印象について、こうほくから緊急支援をお送りした支援団体のちひろシレスター及川さんにお話しましたところ、街の大方は活力を取り戻している、と言われていました。被災し困窮している方々は別のところにおられるように思います。



ただ地震の爪痕は、街のあちこちにあります。被害がひどいのは、寺院と煉瓦造りの古い住宅で、コンクリート製と思われる比較的新しい建物は持ちこたえたか、補修で済んだものと思われる。



現地の方からお話も聞きました(在住日本人、日本語の話せるネパール人、英語の話せるネパール人)。地震発生時は、それは恐ろしく、その後も大変だったと言われていましたが、現在も生活に困っているというお話はありませんでした。「地震」の言葉を出すと、「お寺が壊れて」と返ってきます。ご家族や友人を亡くされている可能性もあるので、あまり軽々に尋ね回ることもできず、根掘り葉掘りも聞けませんが、お話ぶりから、現状の生活には特別不自由はなさそうな感じがしました。

屋根や軒先のラインがうねった箇所については、それは地震の前からだ、と言われたので、街中の歪みの全てが地震の影響というわけでもなさそうです。

「大変だった」という言葉に力がこもっていたのは、むしろ去年の、インドによるインド・ネパール国境封鎖のように感じました。ガスも水道も石油もなくなり、火を起こして煮炊きをした状況は、おそらく地震直後もそうだったと思いますが、国境封鎖の方が直近のこととして、あるいは受容しにくい事態として、強く記憶されているのではないかと思います。

最後に、パタンで出会った結婚式の行列とそれを眺める長老たちの写真をご紹介します。



簡単ではございますが以上です。